

校長会 みえ No. 61



私の学校づくり

つながりを大切に ～地域とともに～



亀山市立加太小学校 校長 武内 早奈美

本校は、今年度創立147周年を迎え、長い間、地域に支えられながら様々な教育活動を進めてきました。現在全校児童30名で、殆どの児童がバス通学をしています。私の朝は、学校近くの交差点や正門で子どもたちを迎え、地域の方と挨拶を交わすことから始まります。

加太は、豊かな自然と文化的・歴史的な教育資源、地域人材に恵まれています。そこで、私は、「地域とのつながり」「子ども同士のつながり」を大事にすることにしました。

地域とのつながりを大切に「ふるさと学習」では、地域の方が講師となり、自然薯やさつまいもの栽培、梅の収穫、稲作などの体験学習活動や大和街道、鉄道遺産群等について調べる学習を行っています。小規模校の良さを生かし、子どもたちが「自ら伝え、自らかわる」場面を大切に地域

の方とつながることができました。

また、子どもたちが企画運営をする異学年交流を計画的・継続的に行い、子どもたちが達成感を味わい、人と関わる喜びを感じられるように子ども同士のつながりを大切にしてきました。子どもの主体性を育むには、教師がお膳立てしすぎても「ただ任せる」だけであってうまくいきません。このことは、教師の子どもへの関わり方を考える良い機会となりました。

社会の急激な変化、コロナ禍によって、今まで大切にしてきた人と人とのつながりが希薄化してきていますが、どんな時代でも人として相手を思いやる心、自分を大切にできる心、家族・ふるさとを愛する心は、学校・家庭・地域がつながってこそ、子どもたちに育んでいけるものです。これからも人とのつながりを大切に地域の良さを知り、ふるさとを誇りに思う子どもの育成を地域とともに進めていきたいと考えています。

今日的課題の 克服に向けて

保護者・地域とともに ある学校・園をめざして

松阪市立港小学校 校長

松本 篤史



近年、地域社会の教育力や子どもたちの規範意識の低下などにより、学校が抱える課題は複雑化・困難化している状況にあります。このような状況の下、「開かれた学校」から「地域とともにある学校」とも言われるようになりましたが、新型コロナウイルス感染拡大からいろいろな面で、従来通りにはできないという課題も出てきています。

今年度、私が本校に赴任して感じたことは「学校と地域との繋がりが強い」ということです。4月の挨拶回りから始まり、地域での会合に出席した時、学校へ来校していただいた時など、多くの地域の方々とお会いすることができました。「校長は学校にいるんじゃないで地域を歩いてくるといい」と話をしてくださる方もみえ、4月に実施した全校縦割り班でのウォークラリーでは、子どもたち以上に地域を歩き回りました。

また、本校は併設幼稚園がある小学校で、校長が園長を兼務しています。全校児童257人の市内では中規模校ですが、幼稚園は園児数12人の小規模園で、年度初めから、来年度は園児募集をせず、閉園するという話が挙がってきました。「急すぎる」「唐突すぎる」ということもあり、5月から9月まで毎月、行政と保護者・地域との話し合いが持たれました。保護者の方々は「幼稚園存続」を願い、署名活動、ホームページを立ち上げ、話し合いのための資料作成、地域への声かけなど熱心に活動され、来年度すぐには閉園せず園児を募集することになりました。この時も「地域との繋がりが強い」「保護者・地域に大切に思われている」と強く感じました。

このような地域との繋がりは、これまでの先生方の実践・取組のおかげと考えます。松阪市では令和6年度に市内すべての学校に学校運営協議会を設置する予定で取組を進めていますが、本校は平成25年からコミュニティ・スクール推進校となって現在に至っています。CSの理事

は元PTA役員、元保護者の方々に、学校・地域のことに理解もあり協力的です。コロナ禍で回数こそ減っていますが、理事会、学校行事への参加・協力など常に学校・子どもたちのことについて考え、行動していただいています。

今年度は新たに、学校・地域の共催で文化祭を実施することもできました。コロナ禍でできることも限られていますが、知恵を出し合い「今できること」を考え、準備していきました。そして、当日、子どもたちが地域の方々と触れ合い、様々な活動を通して、子どもたちにとっても、地域の方々にとっても、また学校にとっても有意義な機会とすることができました。

しかし「目指すべき目標・ビジョンについて十分熟議できているか」「活動が形式的に、限られた人たちの参画になっていないか」「保護者・地域への啓発不足」などの課題もあります。これらの課題について、今後も様々な活動を見直しながら、学校を核として地域でどのような子どもたちを育てていくのか、保護者・地域とともに考え、協働した取組を重ねていきたいと考えています。

「わたりの授業」における 自立的、協働的な授業の 実現をめざして

大紀町立錦小学校 校長

神森 正樹



令和4年度の学校基本調査結果を見ると、県内小学校における複式学級数は、令和元年度の72学級から令和4年度では85学級と、年々増加の傾向が続いていることが分かります。本校もその例にもれず、令和3年度以降3個複式となり、令和5年度もその状況は変わらず、令和6年度に至っては、1年生が欠学年となる予定です。今後の学校の統廃合の状況にもよりますが、児童数・生徒数の減少に伴う複式学級の増加は、近隣の学校との日頃の情報のやり取りからも、その傾向は続くことが推察されるところです。

そのため、前任の校長は、本校での3個複式を見据えた複式学級における「わたりの授業」実践に舵を切り、その後本校では、「わたりの授業」、「A・B年度方式」、加配を利用した従来の「単学級での授業」の3つの授業形態を組み合わせたハイブリッド方式での時間割を構成し授業実践に取り組んでいます。特に「わたりの授業」では、算数と国語での実践に継続して取り組んできました。

私自身は、複式学級のある学校での勤務経験もなく、当然「わたりの授業」自体を目にしたこともない状態での本校への赴任でした。そのため、一人の授業者が2つの学年を交互にわたって授業を行う「わたりの授業」の形態は、個人に応じた指導が行えるとは思えず、学力保障の面でも「マイナス面の効果しかない。」との考えでいました。また、働き方改革が進められる中、「わたりの授業」を行うことで、授業準備に係る教職員の業務量増加は避けられないことも事実です。

しかし、最初の校内研修会での私の「複式（わたりの授業）」というマイナス面もありますが…」という発言に対し、ある教職員から、「大変ですけど、授業者のスキルアップという点では、プラスの面もあるんです。」という意見がありました。「わたりの授業」を行う上では、単学級の授業に比べ、「教師の出場（でば）」がより重要となり、「ひとり学び」「とも学び」の場面では、子どもたち一人ひとりに「自立的・協働的に学習を進める力」が必要不可欠であることも、授業での子どもたちの姿から学びました。今までの自分自身の授業実践は、余計な発言や指示が多く、それが「自立的・協働的に学習を進める力」の育成を阻害してきたことに気づかされました。

本年度は、研修主題を「自ら伸びようとする子どもの育成～わたりの授業における自立的、協働的な授業の実現をめざして～」とし、「わたりの授業」の実践にさらに重点を置いた校内研修に取り組んでいます。そんな中、6年生（少ない人数ですが）は、全国学力・学習状況調査で全教科県の平均正答率を10～30%近く上回ることができました。複式や「わたりの授業」が子どもたちにとってマイナスとならぬよう、日々の授業実践に懸命に取り組む教職員の姿に感謝しつつ、管理職として、教職員一人ひとりが働きやすく、やりがいを感じる職場づくりに努めることで、「わたりの授業」における自立的、協働的な授業の実現に向け、今後も取り組んでいきたいと考えます。

今日的な課題の 克服に向けて

～不登校生徒対応の現状～

鳥羽市立加茂中学校校 校長

西井 潔



昨年度、文部科学省は「2020年度に不登校と認定された小・中学生は19万人を超え、過去最多を記録した」と発表しました。小1から中3へと学年が上がるほど、不

登校の児童生徒数が増加しています。「問題行動調査」によると、学校を休みがちな「不登校傾向にある子どもの実態調査」では、不登校傾向の中学生だけで33万人という数字も出ており、何らかの理由で登校し辛くなっている生徒が年々増加していることがわかります。

不登校になった理由は本人にもわからないところがあります。友だちとの関係性が悪いとかいじめがあるとかという周りの環境からの理由ではなく、自分自身が出来ないことを責めてみたり、理由もなく不安になったりして、自分自身の心の問題から登校できなくなっている生徒がいます。起立性調節障害であると診断され、生活リズムが安定しないため登校できなくなった生徒もいます。

生徒の心や体調の状況がよくなり、少しずつ登校しようとする意欲が高まった場合でも、本人の体調などにより、その日にならないと登校できるかどうかわかりません。生徒が登校したタイミングで学校はその都度対応をします。

そのような生徒にとって大切なことは、学校に安心していられる居場所の存在です。登校時も、教室に入るか、別室で学習をするかはその時の本人の意思によって決めていきます。何人かで別室で過ごすこともありますし、また別の部屋で話をしたり、学習ではない作業を行ったりすることもあります。しかし、そのように生徒が希望しても教職員数が不足し、うまく対応ができない場合もあります。

教育支援センターや市の健康福祉課とも連携をとり、見守ることと同時にスクールカウンセラーや心の相談員との面談もタイミングをみながら行っています。

また、登校できない生徒に対しては、本人や保護者との関係を切らさないように、担任が家庭訪問や電話連絡をしたり、学校の様子を知らせるプリントを配付したりします。ただ、学校のことを知らせることがかえって本人の心の負担になる場合もあり、通り一遍の対応することはできません。保護者と連絡をとりながら、生徒自身の心が学校に向かうように手立てをとっていきます。

繋がり方として、オンラインという方法もあります。どのような方法がよいかは、タイミングもあり何が最良であるかは難しい問題ですが、根本は人と人とのつながりや信頼関係が一番大切ではないでしょうか。

不登校生徒の対応については、学校にいる教職員だけでは限界を超えている状況であることは明らかです。同じ時間に登校し、一斉授業や学校活動を行う中で、指導をしていくことを前提として組織が作られている今の学校体制では困難です。

校長として今できることは、教職員の心や身体の健康状態に留意しながら、学校全体で継続的に関わっていきける組織づくりを構築していくことであると考えています。

◆全連小島根大会報告◆



全連小島根大会 オンライン及び オンデマンド開催

四日市市立高花平小学校 校長
原 由香里

島根県松江市で学ばせていただくことを楽しみにしていましたが、残念ながらオンラインとオンデマンド開催となりました。しかし、本大会の開催方法が工夫され、ハイブリッド形式で東京と島根をリモートで結び、全国に配信するという、本大会関係の方々の「校長の学びを止めない」という強い思いが伝わり、成功に向けご尽力いただいた大会でした。全体会は進行を島根で行い、あいさつや祝辞、文部科学省講話は東京で行われました。

分科会は期限付きオンデマンド配信で、複数の分科会を選ぶことができました。第5分科会「豊かな人間性を育むカリキュラム・マネジメントの推進」の視点1 和歌山県海南市立黒江小学校の実践は、道徳教育全体計画の見直しと「学びの基本」黒江スタンダードの活用を重視した取組の発表でした。全職員が共通した道徳科の指導を行えるように、授業の手順（授業のねらい、めあての設定、板書の工夫、流れを意識した発問等）を明確化しており、指導力の向上や若手教員の育成にも繋がるものでした。また、掲示物等の学びのコーナーを設置し、道徳性を養うための環境整備も大切にしているという内容でした。発表後は、組織力の活性化に向けての意見交換が行われました。

視点2 広島県安芸高田市立の小中学校は9年間を通して「学び合い」の授業づくりを推進していました。学年単位で複数の教員がチームで子どもを指導支援し、チーム担任制に取り組んでおり、質の高い授業を目指しているという内容でした。相談しやすい環境づくり、多面的な子ども理解、組織的な指導や対応にも有効であることを紹介されました。参集された校長先生の活発な協議を見て、あらためて島根で参加したかったなと感じました。

◆全日中北海道大会報告◆



イランカラプテ 北の大地から 新たな学びを紡ぎ その先へ

津市立美杉中学校 校長
坂本 直哉

某校長先生の代役として、昨年の「全日中静岡大会」に続き、「全日中北海道大会」参加の役をいただいた。自身の節目となる今年、こうした役が巡ってくるのも何かの縁、長い旅路になるなど少々心の準備も整えていたのも束の間。とどまらぬコロナ禍のおおりの受け、今年もオンライン開催への参加となった。

1日目（10/20）全体会。地区提案として、石川県小松市内各中学校より、歌舞伎『勧進帳』を通した伝統文化教育を活かした人材育成の取組が報告された。地元根を継承し、地域と協働し、子どもたちが歌舞伎の世界に傾倒していく様と、教師の指導力向上につながる様子が伝わってきた。一方で、地域指導者の高齢化や後継者不足など、取組の持続性を保つ工夫・改善を重ね、抱える課題に向き合う姿がうかがえた。

午後は、第7分科会「多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成」（提案①岡山・②広島）に参加した。①笠岡市・矢掛町中学校組合立小北中学校…ベテランと若手を融合し育成を図るプロジェクト、市内中学校の授業交流を主とした中連携等が報告された。②江田島市立三高中学校…市内教育研究会授業研修による若手教員の育成、ICTを活用した授業づくりへ若手の積極的登用等の報告がなされた。小グループでの意見交換では、既定の初任者研修にとどまらず、隣接校との交流、校務分掌・座席の配置等に至るまで、育成に向けて模索する実践が共有できた。

2日目（10/21）、「アイヌ・アート・プロジェクト」の民謡・舞踊を鑑賞し、本校で学習する「松浦武四郎」の想いが重なった。記念講演は、メディア等でも活躍される山口真由さん（札幌出身）による「日本に突き付けられる新たな規範～ポリティカル・コレクティブネス～」。デジタルの申し子といえるZ世代の持つ感覚と特質、LGBTからSOGIへ等、変移し続ける価値観に、私たち教師はいかに向き合うべきか、提言をいただいた。従来の観念の刷新と思考の活性化の2日間であった。

本部役員だより



学びと発見のある 本部役員会

三重県小中学校長会 小学校部会長

吉永 泰志

本年度は12名中7名が新役員というメンバー構成となった。前半で特筆すべきは、7月初旬に東陸中三重大会が3年ぶりに参集開催できたことであり、中学校部をはじめ全役員にとって手応えのある大きな喜びとなった。しかし、僅か3週間後の小学校研究大会は新型コロナ第7波の感染急拡大により誌上開催を余儀なくされることとなり、変異株の猛威を痛感した。これらコロナ禍において県規模の行事開催案件は、時々の感染状況によって難しい判断となることが多い。役員会で協議する際、私たちは迷った時こそ判断の軸には「誰一人取り残さないという目標が実現できているか」を据えることを、経験を重ねながら学んできたといえる。

役員会での学びは他にもある。一例として、本年度9月の代表者会で「専門委員会の見直し」として名称や活動の整理を行い役員提案した。その前段階、役員会協議では規約等での位置づけ確認や過去の経緯を踏まえての提案づくりが大切になるが、最長でも2年に満たない現役員の経験や知識の空白を埋めてくれるのが、役員経験もある事務局の皆さんの助言である。特別委員会で毎年取り組んできたアンケートによる実態調査。誰もが毎年アンケートに取り組むものと認識していたが、そもそもの「専門委員会規定」では「第2条」に「専門委員会は、次の事項について、理事会の承認を得て活動(・・・)を推進する。」とあり、学校経営、進路指導などの各委員会に加え「(5) その他必要と認めること」に対し、特別委員会が直近の教育課題に取り組む委員会として組織されていること。また活動(・・・)の内容がアンケートに限定されていないことが分かり、この前提を押さえたうえで新たな名称と活動を見直すことができた。組織の背景を正しく学ぶことの重要性を実感できた貴重な機会であった。

県小学校長研究大会報告



第57回東海・北陸地区 連合小学校長会 教育研究静岡大会に 参加して

津市立南が丘小学校 校長

小林 宏行

静岡県校長会をはじめ、関係各位のご尽力のもと、本研究大会は3年ぶりに会員が参集しての開催となりました。

1日目の午後、第4分科会「知性・創造性」に参加しました。1日目の岐阜県各務原市小学校長会の報告では、指導改善サイクルを活かし、授業改善を進めるため、市内共通のアンケートを作成し、校長会が主催する「教育ジャンプアップ事業」における研究の視点等の理解が広まり、市内共通の視点に沿った子どもたちへの指導につながったことなどが分かりました。

2日目の静岡県御殿場市の報告では、「教育課題の把握と明確な経営ビジョンの提示」「知性・創造性を育む教育活動の実施」



「教育課程の評価・改善」の3つの視点にそって、各学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントを推進していることが分かりました。

2日目の全体会の記念講演では、探査活動プロジェクトリーダーとして活躍された東京大学大学院教授の杉田精司さんから、ご自身の体験を踏まえ、国際社会の中で生きる



リーダーとしてのあるべき姿や今の子どもたちにこれからの国際社会で生きていくための財産を引き継ぐことの大切さについて貴重なお話を伺うことができました。



県中学校長研究大会報告



東海北陸中学校長会 研究協議会を 終えて

伊勢市立倉田山中学校 校長
金森 晃生



7月に第62回東海北陸中学校長会研究協議会が本県において開催されました。3年間の準備期間を経て、東海北陸の各県から多くの方にご参加いただき、参集

型で無事開催することができました。私にとって、大変有意義なものでありうれしく、また開催できたことに安堵しました。8つの分科会を設定し、各県からの取組の発表があり、これからの学校教育における様々な課題とともに解決策について、校長としてどのように考え取り組むべきか、熱心に討議されました。他県の先生方と時間を共有し、直接顔を合わせ情報交換することができました。

全体会は、東陸中松田会長・全日中平井会長の挨拶、さらに来賓の皆様のご挨拶をいただきました。また、記念講演では神島診療所の小泉圭吾さんが「神島とへき地医療のこれから」と題して、たくさんの映像を提示され、素晴らしいご講演を聴かせてくださいました。小泉さんの人柄と熱意を感じ、私も教員としての使命や責任を改めて自覚することができました。

研究協議会開催に際し、各校長先生に感謝するとともに、三重県小中学校長会のつながりが一層強くなり、これからも三重県の子どものため、横のつながりを大切にしたいと感じました。



随 想



任せること

木曾岬町立木曾岬中学校 校長

水谷 予司之

今まで教員として、いろいろな経験をして、反省したり自信を深めたりしながらその後に活かしてきました。

その中でも特別な経験となった三年間がありました。2005年に開催した中体連の全国大会までの三年間です。私は専門委員長として、大変多くの方々に協力していただきながら大会まで準備を進めました。私の勤務する学校では2004年から加配をつけていただきましたが、私以外の先生や社員をされている方々は、自分の仕事を軽減されることなく、大会のための重要な役割を担っていただきました。

私の頭の中には大会を迎えるまでの各部署の計画や仕事内容がありました。しかし、実際は各部署の部長を中心にそれぞれが考え、試行錯誤しながら準備を進めていただきました。私は各部の連携や準備内容をチェックしたり、外部との交渉や資金調達をしたりしていました。

月日は驚くほど早く流れ、昭和50年の三重国体以来の全国大会を連盟や参加選手・保護者から感謝の言葉をいただくほど立派な大会に創りあげていただきました。関わっていただいた方々の顔には、達成感や満足感が溢れていたように思います。

この経験から、「ゴールや目標だけを示してあとは任せる」というやり方をいろいろな場面で用いてきました。

任されると責任感と自己有用感が高まり、生徒も教員も驚くほど成長し、自信を深める姿を何度も見ることが出来ました。時には目標を上回る結果を見せてくれることもありました。

近年のコロナ対応や働き方改革を含め、いろいろな場面で決断を迫られることが多い校長という職です。私はしんどい時になると全国大会運営時のしんどさが蘇ってきます。重い責任はやりがいでもあり大きなストレスでもあります。校長先生方がうまくストレスを解消されてお元気で活躍されることを祈っています。



バトンを渡すとき

名張市立桔梗が丘東小学校 校長

西澤 祐子

退職を迎えるにあたって執筆の依頼を受けたものの、今はまだ、退職という実感がなく、「やり残したことはないか」と自問自答している毎日です。

さて、あらためてこれまでの35年を振り返ってみますと、平成7年の阪神淡路大震災や平成23年の東日本大震災、新型コロナウイルス感染症など、日本はこれまで経験したことのない大きな危機に遭遇しました。そして、その度に、命の尊さについて深く考えさせられると共に、“当たり前”の日常がどれほど幸せなことなのかということを考える機会となりました。私自身、この35年間の中で、結婚、出産、育児など、様々な人生の節目がありました。30代、40代は、子育てと仕事の両立で、まさに怒涛のごとく、時間が過ぎていきました。中学校教師として、悩み多き思春期にある生徒たちとどうかかわればよいのか悩みながら、共に過ごした日々を懐かしく感じます。

40代後半からは、市教委の指導主事として、学校を外側からサポートする任務に就きました。市教委での数年間での学びは私の人生の中でも大きなものとなったと思います。

そして、50代に入り、小学校の教頭という立場で、再び学校現場に戻らせていただきました。教頭として、2校で勤務をしましたが、2校ともかつて、私の実母が勤務させていただいていた学校で、縁の深さを感じるとともに、長きにわたり、名張市の教員として勤めていた母からバトンを渡されたような気がして、「新たな気持ちでがんばらねば」という思いになりました。そして、当時の母のことを知ってくださっている方や母に担任してもらったという方にも出会うことができ、思いがけないつながりに心が熱くなりました。

退職の前に、母から渡されたバトンを、次は私が次の人に渡す立場となりました。これまでの自分を振り返ってみたとき、「今まで自分は次の世代の人にどんな姿を見せてきたのだろうか」「一体、自分は何を残せたのだろうか」と自問自答する毎日ですが、しっかりバトンを渡せるように、残された日々を精一杯、私らしく生きていきたいと思っています。

熊野市小学校長会

県最南端の地「熊野」より

「津への出張といえば、車で3時間余り。」これは、わたしたち世代が教員として働き始めた頃のことです。国道42号線をひたすら北へ。佐田坂を上り、尾鷲市へ。そして、そこから矢ノ川（やのこ）峠、荷阪（にさか）峠を越えて……。それが今では、自動車道の開通で、熊野市から津の市街地にある目的地まで、2時間もあれば余裕で行けるようになりました。このことは、精神面、物理面での苦痛が軽減され働き方改革にもつながっています。

どんなに交通の便がよくなっても少子化は進み、市全体の子ども数は、どんどん減少しています。現在、市内には8つの小学校がありますが、ほとんどの学校が1学年1クラスで推移しています。そして、その半分の小学校は、複式となっています。

現在、小学校長会として、8人で活動をしています。各校に共通する課題、学校特有の課題を抱えながらも情報を共有し、わからないことは聴き合い、助け合って教育活動に取り組んでいます。会の活動は、月に1度。市の小中学校長会に合わせて開催しています。「情報共有」が主な内容ですが、課題解決のための相談会のようにもなってしまうこともあります。昨年度は、感染対策でオンライン開催が多く、集まって話をする機会があまりとれませんでした。今年度は、順調に開催できています。集まって、顔を見て、「あれだ、これだ」と話ができることはとても心強く、その時間はたいへん貴重なものとなっています。

「終わったら、おいしいものを食べましょう。」と言える日を待ちわびています。



編集後記

立春も間近となりましたが、余寒厳しい日々が続いております。各小中学校におかれましては、1年の集大成である3月をひと月後に控え、慌ただしい日々をお過ごしのこととご拝察いたします。

そんなご多忙中、「校長会みえ」第61号の発行にあたり、多くの先生方に原稿執筆を快くお引き受けいただきました。心より感謝申し上げます。今年度もなかなか終息を見いだせないコロナ禍の中、各学校では日々の状況をきめ細かく見定めながら、できる限りの工夫や見直し、修正をしつつ、教育活動

松阪市中学校長会

夢を育み未来を切り拓く松阪の人づくり

松阪市では、令和3年4月に「夢を育み未来を切り拓く松阪の人づくり」を教育大綱の基本理念に位置づけ、急激に社会が変化し、予測困難な時代においても、子どもたちに持続可能な社会の担い手として、自律的で創造性豊かに生き抜く力を育む教育を推進しています。

本年3月には、松阪市の教育の総合的な基本計画として29の教育施策からなる教育ビジョンが策定されました。中学校長会では、11校の校長が月1回定例会を開催し、教育ビジョンの実現に向けて、松阪市教育委員会の所管事項の説明や各校の取組の様子、成果・課題を共有し意見交換を行っています。

今年度は、全国的にも課題となっている不登校の子どもたちへの支援策として「いきいき学校プロジェクト」が立ち上がりました。これは、不登校を未然に防ぐための取組や子どもたちの居場所づくり、人間関係づくりを目的としています。具体的な取組の一つとして、中学校区に1つの教室と担当の支援員が配置され、子どもたちが利用できる居場所作りがスタートしました。また、不登校児童生徒指導員、通称「NASS」との連携による家庭訪問型の支援も始まりました。さらに、不登校児童生徒を生み出さない居心地のよい学級づくりの観点からは、すべての小中学校でソーシャルスキルを育むトレーニングにも取り組んでいます。

これからも松阪市中学校長会では、誰一人取り残さない松阪の教育を実現し、子どもたちが自分の言葉で夢を語り、未来を切り拓く力を育む教育を推進していきます。



を続けてきたことと思います。

まだまだ先の見通しの立てにくい現状ではありますが、こんな時こそ「子どもファースト」の基本に立ち返ることが何より大切だと思います。校長先生をはじめ学校の全教職員で知恵を出し合い、「子どもたちのために、今、何ができるのか」の視点に立った、柔軟で創意工夫ある教育活動を、「チーム学校」で創り上げていきましょう。

すべては、子どもたちの「笑顔」のために。